

主役は、私たちだ。

YOKOHAMA SOEI

JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

SCHOOL GUIDE BOOK 2024

ACCESS

大口駅	徒歩8分	
子安駅	徒歩12分	
妙蓮寺駅	徒歩17分	

大船駅(JR東海道本線16分)→横浜駅(JR横浜線6分)→大口駅
大和駅(相鉄本線急行21分)→横浜駅(JR横浜線6分)→大口駅
川崎駅(JR京浜東北線12分)→東神奈川駅(JR横浜線3分)→大口駅
町田駅(JR横浜線26分)→大口駅
上大岡駅(京浜急行本線13分)→横浜駅(京浜急行本線6分)→子安駅
武蔵小杉駅(東急東横線13分)→妙蓮寺駅

EVENT

学校説明会の詳細・ご予約方法、
その他のイベントについては、
本校ホームページをご覧ください。



本校のホームページ上で、
詳しい募集要項を公開しています。

中学



高校



横浜創英中学・高等学校

横浜市神奈川区西大口28番地

TEL:045-421-3121

<https://www.soei.jp/>

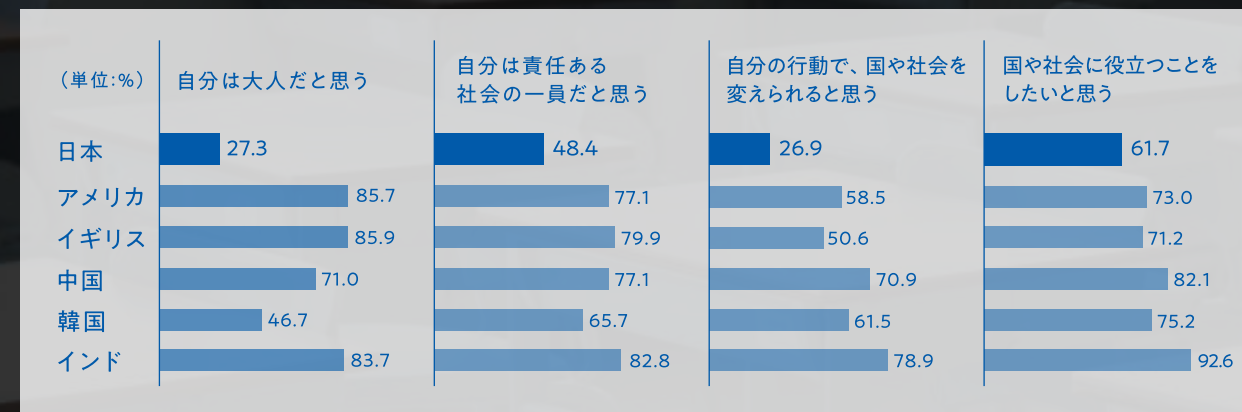


横浜創英
中学・高等学校

どうして日本は、 こうなってしまったのだろう。

「自分には社会なんて変えられない」、と思う日本の学生。

自国の若者が、国や社会をどう捉えているかが浮き彫りになる「18歳意識調査」(下図参照)で、日本は非常に低い数字を示しています。そしてご存知の通り、日本経済は低迷が続いています。2020年の労働生産性についての調査では、OECD加盟38か国中、日本は28位。1970年以降、最低の順位です。横浜創英は、この事実と先のデータが、日本の学校教育の問題点を示していると考えます。



※ 18歳意識調査「第46回 -国や社会に対する意識(6カ国調査)-」報告書／日本財団(2022年)

「与える教育」が、当事者意識を奪ってきた。

日本の学校教育は、常に「与える」ことばかりで、生徒は常に受け身です。担任を決められ、時間割を決められ、授業を受けさせられる。これが、日本の教育の最大の問題点。主体的に学びに向かう姿勢を育む環境や仕組みが存在しないのです。その結果、日本人は「当事者意識」を失ってしまったのです。

教育が奪ったものは、 教育でしか取り返せない。

世界の教育は、どこに向かっているか。

あらゆる社会課題の原因が「与える教育」にあるなら。まずは日本の慣習にとらわれず、フラットな視点で教育を再構築する必要があります。そこで横浜創英は、世界に目を向けました。「OECD Education 2030」でもふれられているように、世界の教育トレンドでは、単なる知識や技術を超えた「素養(=コンピテンシー)の獲得」を目標に設定しています。

自己決定できる人材の育成

不確かな時代においては、目標を設定する力や、その達成のために必要な行動力が求められます。学校教育においても、主体的に行動を起こす経験を積むことが重要と考えられています。

ジレンマを解消できる人材の育成

複雑化する社会では、多様な考え方を認め合い、互いの利害を調整する力が必要です。その習得のためには、相手を理解し、合意点を見つけ出す対話の技術を身につける必要があります。

手段が目的に成り代わった教室から。

日本の教育も、自律した人材を育成するために「知・徳・体」を身につけることが目標になっていました。しかし、きっと皆さんも身に覚えがあるように、学校は基礎学力や、礼儀、礼節を身につけることだけを重要視します。これらはコンピテンシーを獲得するための手段のひとつですが、今の教室では、まるで目的のように扱われています。なぜ、こうなってしまったか。横浜創英は、真剣に向き合いました。

もう、 誰のせいにもするな。

日本はもう、取り返しのつかないところに、足を踏み入れようとしている。

脆弱なデジタル環境、環境問題への低い意識、国際化への乗り遅れ。

複雑な社会問題は、対立とねじれを起こし続ける。

それなのに、私たちはどこか他人事だ。

国か、政府か、偉い人たちか。とにかく誰かが、きっと何とかするだろう。

そうやって、次の世代を不幸にする問題は、また大きく、ふくれあがっていく。

このままで、いいはずがない。誰かのせいにしていても、何も変わらない。

自分で考え、行動できる人が、今の日本には必要だ。

それなら、横浜創英から変えていく。

もう私たちは、中学や高校なんて枠組みに縛られないし、

生徒たちを子ども扱いすることもない。

教えるだけの授業では、身につかない。

学びたいことを学ぶためのシステムを。

学校の教室だけじゃない。

学びたいものが待つ場所に、自ら足を運べるサポートを。

あらゆる問題の原因が教育なら、解決するのも、教育だ。

だから、私たちが変えていく。

そして、あなたはどうしたい。





これからの学習者

自ら学ぶ。
目標に向かって行動する人。

「自律」と「対話」、そして「創造」のコンピテンシーを身につけるには、目標達成のために学ぶのは自分自身であるという当事者意識を持つことが必要です。毎日の授業をこなす、与えられたテストで点数を取ることが目的になるのではなく、より良い社会を創るにはどんな学びが必要かを考え、そのための行動を起こすことができる素養が求められます。学びを社会につなげ、教員や仲間と協働して力強く学んでいく。能動的な学習スタイルを身につけていきます。

BEFORE

教わる

用意された時間割や宿題をこなす、
受動的な学習スタイル。

AFTER

学ぶ

自ら何を学ぶべきかを
考え、アクションを起こす
主体的な学習スタイル。



これからの教員

与えない。
学びを支援する人。

「一方的に教える授業」「たくさんの課題・宿題」は、主体的に考える力を奪っていきます。横浜創英では、教員間で「3つの言葉掛け」を徹底しています。もし困っている生徒がいたら「どうしたの?」、次に「きみはどうしたいの?」、最後に「私に支援できることはある?」。初めのうちは、何をしたいのか、答えられない生徒がたくさんいます。しかし、これらの問いを繰り返すことで、「自分のやりたいことは何か」を考え始めます。生徒たちは、このプロセスのなかで学びの目的を見つけ、自律して学び始めます。

BEFORE

教える

教室全体に対し、
同じ速度で問題の
解き方を教える
指導スタイル。

AFTER

支援する

一人ひとりの目標に対し、
乗り越え方をともに考え、
支援するスタイル。

これからの支援

新しい学習スタイルには、
自らを自分でコントロールする力が求められます。
その過程で、生徒たちが困ったときや悩んだときのために、
支援体制をアップデートしました。

絶大なる信頼の教育相談室

本校では優れたプロのスクールカウンセラーが2人体制で支援にあたっています。専用のカウンセリングルームがあり、生徒だけでなく保護者の方のご相談にも応じます。生徒の気持ちを受け止め、感情を整理する支援をします。また、保護者の方の、お子様に関する悩みについて、一緒に考えていきますので、是非ともお気軽にお立ち寄りください。

アンガーマネジメントの授業

アンガーマネジメントジャパンの協力のもと、様々なスキルを身につけます。自分の中にある様々な感情への気づきから始まり、怒りの感情と他の感情とのつながり、さらにストレスマネジメント、考え方の傾向、アサーティブコミュニケーションなどを学びます。それにより自分の感情や考え方を振り返り、行動を変える「メタ認知」が高まります。深い自己理解から、より良い人間関係の構築へとつなげます。

創英が やめること。

横浜創英の最上位の教育目標は、
「考えて行動のできる人」の育成。
そのためには、これまでの学校教育の
「当たり前」を見直して
子どもたちが自律して学んでいく仕組みを
作っていくことが大切だと考えています。

社会背景・世界水準を意識して、
横浜創英が始めていく改革。
もしかしたら、そのいくつかは
常識から外れた、突飛な試みに
見えるかもしれません。
でもこれらはすべて、
子どもたちを当事者に育てていく
最適な手段だと、私たちは考えています。

固定担任制を、 やめる。

なぜやめるのか？

年間を通して、同じ生徒を同じ教員が管理する固定担任制は、学校側にとっては効率の良い手法でした。しかし、「あっちのクラスの担任はアタリ」「いくらがんばってもこの先生とは合わない」という意識を持つ生徒が存在するのも事実。固定担任制は、生徒たちの他責思考を生み出してしまいます。



教師が一方的に 教える授業を、やめる。

なぜやめるのか？

教員が教壇に立ち、同じ授業をクラス全員に一方的に教える。この当たりのスタイルの問題点は、「一人ひとりの理解の違いに向き合っていない」という点。理解が遅れている生徒にとっても、進んでいる生徒にとっても、非効率な時間が放課後まで過ぎていきます。



学校の中だけの授業を、 やめる。

なぜやめるのか？

子どもたちにとって受験は大切ですが、目の前の点数にこだわってしまうと、学びが社会につながりません。1点でも高い点数を取るために、1分でも1秒でも長く机に向かうことが、社会に貢献する学びでしょうか。社会に貢献するための学びは、学校の外にもあふれているはずです。



リーダー養成講座

横浜創英では、リーダーとは「人が動かないことを知った上で
目標達成のために協働が生まれる言葉を使える人」と捉えています。
価値観の合わない他人同士、思うように動かないのは当たり前。
そのうえで対話を繰り返し、同じビジョンを共有することで、
目標を達成するための働きかけができる人を、私たちは「リーダー」と呼びます。



対立を避けることが リーダーの役割ではない。

先に誤解を解きたいと思います。リーダーの役割は、集団をまとめることではありません。社会的背景も思想も異なるグローバル社会では、一人ひとりが同じ考えを持つということはありません。必ず対立が発生します。その対立を避けて、ある意味で妥協的な解決点を求めて集団をまとめあげる行為は、必ずどこかで齟齬が発生させるか、重要な決定を下すことができない、非常に力の弱い集団を形成する行為です。



何を解決すべきか、 課題を捉える「自律」を身につける。

集団を動かすために重要視されるのは「最上位の目標を共有する」ことです。意見が異なるもの同士でも、その共通項を探れば、最適なアプローチが見つかります。そのためには「何を解決すべきか」という、最上位の目標を設定する力が必要になります。講座の前半では、その力を身につけるための「自律」のコンピテンシーを養います。

対立のジレンマを解消する スキルを身につける場を。

ここまで伝えている通り、これまでの日本の教育では、集団生活のなかで「対立を避ける」「調和を尊ぶ」姿勢を重視してきました。しかし、それでは社会に出たあとで、意義のある決定を下す素養が育たないのです。リーダー養成講座は、決して集団をまとめる手法ではなく、重要な決定を下すために、対立を解消するスキルを身につける、全8回のプログラムです。

多様性を知り、 認め乗り越える「対話」を身につける。

リーダーとして次に必要な素養は、一人ひとりの多様性を知ること、そして互いの考えを認め合い、伝え合うためのスキルです。ここで必要になるのが、対話のコンピテンシーです。講座の後半では、他者の意見・考え・目的と、自らの目標を照らし合わせ、それぞれに最適な働きかけをする手法を学びます。

PICK UP PROGRAM



多数決の危うさ

誰もが多用しがちな多数決。しかし多数決はある条件が整った上で使わないと危険を伴います。多数決はどんなときに適切に使ったらよいのかを校長自ら伝え、生徒に実践してもらいます。



言葉の選択と配列

どのようにすれば言葉を上手に相手に伝えることができるのでしょうか。「相手がわかってくれない」と考えず、自分が発する言葉を工夫する練習を行います。



メタ認知能力

人間の脳はポジティブなことよりも、ネガティブなことに敏感に反応します。無意識で行ってしまう否定的な考えを、どのようにポジティブに変えればよいのか。それをディスカッションしながら学んでいきます。



プレゼンテーション

講座の最終回には15分のスピーチの冒頭2分だけをおこなうマイクロプレゼンを行います。2分でどれだけ聞き手に「もっと聞きたい!」と思ってもらうかが大切です。



STUDENT's VOICE

思考を言語化して伝えることで、
さらに深い思考を実現できる。

グループディスカッションの際、付箋に意見を書き出して共有をしたのですが、自分の考えが一気に広がっていく感覚になりました。他人の意見を自分の思考に取り入れるという行程を踏むだけで、これほどまでに考えが深まっていくのか。そのときの衝撃は今も胸に残っています。ひとりで考えるだけでなく、伝え合うことの大切さを思い知りました。



高校2年 志賀 圭矢さん

Case 02

4Cスキル研修

勉強のための勉強に意味はない。そう考える本校では、学校を小さな社会と捉え、学校生活=社会生活に生きる4つのスキルを身につけることを目的とした合宿を行います。4つのスキルは「Creativity(創造)」「Communication(対話)」「Collaboration(協力)」「Critical Thinking(分析的思考)」。それぞれの頭文字を取り、「4Cスキル」と呼んでいます。

WHY

**問題は必ず起きる。
解決するのは対話のスキル。**

多くの学校では、校則を定めたり、先生が厳しく指導したりすることで、トラブルの防止・解決を行おうとしています。しかし、学校生活、ひいては社会において、トラブルは必ず発生します。だからこそ、横浜創英では、トラブルを解決する唯一の方法として「対話」のスキルに磨きをかけます。対話によって、お互いの共通の目的に向けて合意し、トラブルを乗り越えていく力。それこそが、多様性の時代に求められるスキルであり、それを身につけるためのプログラムが、4Cスキル研修です。

HOW

**問題はチャンスに変えられる。
チャンスに変えるのもスキル。**

問題や失敗を、悪いこととして感じている方もたくさんいるでしょう。しかし、問題や失敗は本当に悪いことなのでしょうか。横浜創英では、問題や失敗を良い経験として、成長につなげるチャンスとして捉えています。4Cスキル研修では、目の前の問題や失敗をどのように乗り越えていくかを考え、ディスカッションし、問題をチャンスと捉える思考法を身につけていくと同時に、様々な対話スキルを学んでいきます。他人との対立、意見の食い違いも糧にしながら、社会に生きる力を身につけます。

PICK UP PROGRAM



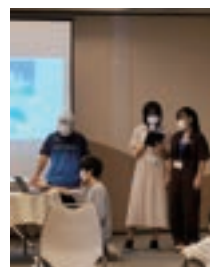
ブレインストーミング

意見を出すときに必要なマインドセットを習得。「出た意見を否定しない」で「質よりも量を重視する」。その上で「面白いアイデアをみんなで組み合わせ」て検討し、目的にあった意見選びを行います。



トライアル&エラー

話し合いの進め方や時間の使い方など、チームに必要なスキルを様々な角度から学ぶプログラム。チームに1人ずつ、ファシリテーターとして大学生が付き、サポートを受けながら進行します。



プレゼンテーション

2022年度は『一人ひとりが幸せを実感する10年後の私たちに届けるプロジェクト』をテーマに企画を考案。内容にストーリー性をもたせ、見せ方のコツや一貫性のあるプレゼンを心がけました。



リフレクション

よかったと感じたことを伝える「ほめ合いのワーク」を行います。チームメンバーに対して前向きな声かけを行うことで、その後のグループワークを円滑に、和やかに進めることができます。



STUDENT's VOICE

**合意形成までの複雑なプロセスと
ひとりではたどり着けないゴール。**

合意形成の難しさと意義、両方を実感した合宿でした。自分たちで新しいゲームを企画するプログラムでは、まずはルール決めでつまずきました。誰かの意見を取り入れると、誰かと相反する。その対立をまとめあげるまで時間はかかりましたが、全員のアイデアを反映したゲームは奥深く、ひとりでは創り出せないものだったと思います。



中学3年 翠 晃太郎さん

Case 03

コラボレーションウィーク

多様な価値観があふれ、答えのない時代と呼ばれる現代、そしてこれからの社会。
求められるのは、ひとつの正解に向かって突き進むのではなく、新しい答えを導き出す力です。
本校では、自分の知識や技能を組み合わせる新しい答えを生み出す力を育てるべく、
複数の教科を組み合わせ合わせた合科型の授業を行う「コラボレーションウィーク」を実施します。

WHY

これから求められる、
知識や技能を組み合わせる力。

今は成長期が終わった成熟した社会です。誰もが認める万人の正解などなく、価値観は多様です。そういった社会で求められる能力は、たった一つの正解を探し出す力ではなく、自分の知識や技能や経験を組み合わせる自分自身の考えを導き出す力です。そのためには、一つの教科の力だけで課題を解決することは困難で、合教科の力を持つことが求められます。

HOW

40名を超える教員が繰り出す、
20を超えるミッション。

コラボレーションウィークは、高校1・2年生の9月に1週間かけて実施する取り組みです。40名を超える教員が、担当教科が異なる教員同士でペアを組み、20以上の講座を開講。初日には外部講師から合教科の意義を聞くオリエンテーションがあり、2日目からは、各講座で生徒たちにミッションが与えられます。そこから2日半をかけて研究を行い、最終日にプレゼン発表を行います。

教科ごとに身につく力は異なる。
だから、合わせて考える。

育てる能力は、教科によって違います。数学は、物事が感覚的に流れそうなときに、論理的には間違っているなら「間違っている」と言える力を育てます。社会科は、決着をつける議論はしません。多様な価値観を尊重して対立をコントロールする力を育てます。それぞれの教科ごとに育てる力があり、それを社会の状況に応じて組み合わせる力を育てようというのが合教科の発想です。

学年の枠も、学校の枠も
超えてこそ、価値が生まれる。

2023年度からは、高校1年生と2年生が合同で行う「無学年制」での実施を予定しています。社会に出れば、同じ年齢の人とだけ仕事をするということはありません。だからこそ横浜創英では、あらゆる教育活動で学年枠を崩し、学校と社会の同一化を進めています。コラボレーションウィークの成果も、文化祭でのプレゼン発表を通し、学校外部の方々にも研究成果を評価してもらっています。

PICK UP PROGRAM



英語×社会
なぜ日本人は英語を話せないのか
～話せない自分を変えよう～

日本の英語教育は本来の目的を失っていないか。大切なことは「英語を使って何をしたいのか」。幕末のサムライの英語勉強法をヒントに英語教育の本来のあり方を模索し、それに沿った英語の学習方法を考えました。



数学×国語
間取り図解いまむかし
～鴨長明の行きついた四畳半の城～

古典の名作『方丈記』を、数学的な知識を用いて読み解く講座。縮尺の知識を生かして「方丈の庵」の間取り図を再現したり、「方丈の庵」を現代に再現する費用を計算したりと、様々な視点で研究しました。



体育×英語
Dance Dance Revolution 2022

自分で振り付けを考えたダンスを、英語で紹介する活動をした講座。目的は「楽しいダンスを作る、伝える!」。英語はあくまでその「手段」です。英語の字幕をつけたTikTok風の動画の作成もしました。



理科×社会
Social & Natural Science

自然科学と社会科学を融合し、身の回りのものや文化について科学的な理解を深める講座。例えば、「平安時代になぜ紫は高貴な色とみなされたのか」という疑問を、実際に紫色を作ることで解明しました。



STUDENT's VOICE

知識は、インプットだけでなく
アウトプットすることで定着する。

参加した講座は、数学と理科のコラボレーション。「生物に関する謎を解明する」というミッションの解決に、5人ほどのグループで取り組みました。個人での調査とメンバーとの議論を繰り返すなか、自分が調べた情報や仮説を他人に伝えることで、得た知識を効率良く吸収できました。インプットとアウトプットを反復する、その重要性を体感しました。



高校2年 小松 健惺さん

Case 04 高大連携

横浜創英は、今の高校生に十分な可能性があることを信じています。きれいだものではありません。
アプローチ次第では、社会的な課題を分析し、達成可能な未来図を描いて解決し、新たな価値を創り出せる資質を備えている。
だからこそ、高校時点で社会とつながる経験を積むべきであり、高大連携は、その重要な柱です。



真似事が通じなくなる、 これからの社会。

近い将来、今ある企業の多くは形を変えていくでしょう。ここまで語ってきたように、情報技術の発展や、課題が複雑に絡み合う社会構造のなかで「これまで通り」が通用しなくなるからです。人口の豊かな時代なら、成功した企業の真似をしていれば良かった。でも、今の時代は真似事ではなく、人が誰もやっていないことを考え、実行していく力がないと、社会を生き抜くことはできなくなっていくます。



自身の「尖り」を 強く意識できる高校へ。

日本の教育は、高校までを広く浅くのリベラルアーツ（一般教養）の習得期間として、その後の大学・専門学校、大学院で専門的なスキルを身につける構造になっています。この境目を薄くすること、それが創英のめざす高大連携。自分の強みや尖りを高校時代から意識できる環境を構築し、より専門性の高い学びへ、自ら進んでいく構造へと改革を進めています。

社会に必要な経験を、 「高校」が提供する。

横浜創英は、高校生の可能性を信じています。それは将来の話ではなく、現時点で社会に貢献できると考えている、という意味です。そのために、高校という場所を社会で活躍するための場所に変わっていきます。社会に必要な経験を、高校が提供していきます。それを基本的な考え方に、社会とつながることを目標としたカリキュラムを構築しています。

高校3年の午後からは 「大学生」として学ぶ。

新しい教育課程では高校3年生の午後は自由選択の時間帯としました。通年で大学の講義を受け、それを高校の単位として認定するシステムを構築しています。将来的には、高校時点で受けた講義が大学進学後の単位として認定されるようにする想定です。また、大学が開催する長期休業中の集中講座を公開し、本校の多くの生徒が講座に参加することで、大学や社会とつながることを目指します。

PICK UP PROGRAM



法政大学 課題解決型フィールドワーク

法政大学との連携では、フィールドワーク型の学部横断のプログラムに参加。本校生徒参加時のテーマは自然災害。災害発生時、被災者を大学で受け入れる際、どのような施設が必要かを学びました。



産業能率大学 探究型プロジェクト学習

経営学部の学生が、石垣島に高校生を修学旅行生として誘致するために、SDGsを加味したプログラムを作成します。本校の生徒は、プレゼンテーションの講評・評価者として探究型学習に参加してきました。



清泉女子大学

高大接続調印

社会的な課題を分析して、達成可能な未来図を描いて解決する。社会力というのは、社会をデザインする力であり、デザインすることを楽しむ力です。学校の外に出て行かなくては社会のデザインはできません。創英では、高校生の段階から大学に出ていく環境を構築しています。

- 麻布大学 生命・環境科学部
- 清泉女子大学 地球市民学科
- 産業能率大学
- 城西大学
- 城西国際大学
- 法政大学
- 筑波大学医学群（予定）

7 (予定) 大学



STUDENT's VOICE

大学で学ぶ、未来への期待が 大きくふくらんだ経験。

私が参加した産業能率大学の講義は、大学生が高校生向けの旅行プランを提案するという内容でした。そのプレゼンは、ただプランを説明するだけでなく、ターゲットの私たちが楽しく聞けるようさまざまな工夫が凝らされており、加えて大学生本人もとても楽しそうでした。私もあんな風に、学んだことを実践する楽しさを味わいたい。大学進学への期待が一気にふくれた体験でした。



高校2年 石井 桃子さん

Case 05

企画型修学旅行・選択型旅行

学校側が用意した旅行プランでも、生徒たちはきっと楽しんでくれるでしょう。

しかし、青春時代の大切な思い出を、自らの手でつくりだすことができれば。

それはきっと、もっとワクワクする経験になるでしょう。

そして、修学旅行や研修旅行が学びの場であるなら、その準備さえも学びの場であるべきです。

WHY

多数決で決まったプラン。
少数派は、どう思うか。

「行き先は北海道か沖縄、どっちがいいだろう?」。これを生徒に問いかけ、多数決で決めさせれば、一見生徒たちに寄り添った修学旅行に見えます。しかし、少数派にとってはどうでしょうか。修学旅行は学びの場であるとともに、一生の思い出の場。どこかで「沖縄の方が良かったな」と思うってしまう時間は、寂しいように思います。そう、多数決という手法は「この学校じゃなければ」と、他責思考に陥りやすい構造になっています。多様性を認めようと謳う教育からかけ離れていることは明らかです。

HOW

旅行代理店との折衝を経て
6つのプランを作成。

横浜創英は、まず「行き先がひとつ」という前提を取り下げました。生徒たち全員が、希望する行き先を選ぶ状態をつくるためです。有志の生徒がグループに分かれてプランを作成し、さらに旅行代理店との交渉・折衝へ。6つの修学旅行プランを完成させ、学年全員へのプレゼンテーションを行いました。

学校行事は、誰のためのものか。

学校行事は、クラスや学年という集団の一員として全員が動き、協働力を高めるためのものです。しかし、その場を学校主導でつくりあげることは、果たして正しいでしょうか。生徒たち全員が納得する学校行事をつくるには、生徒の手でつくりあげる方が建設的でしょう。学校が準備したプログラムに積極的に参加できない生徒も、この方法なら自ら考え、前向きに参加することが期待できます。

自ら選んだプランだから。
本気で、前向きに参加する生徒たち。

例えば、北海道を選んだ生徒たちは、2泊3日の間スキー漬け、というプランでした。学校主導で実施した場合、こんなプランはなかなか出てこないでしょう。広島を選んだ生徒たちは、平和学習に取り組みました。行かされる、聞かされる講義とは異なり、生徒たち全員が前向きに学んでいる姿が印象的でした。

希望制海外研修旅行

インドネシア・ニュージーランドなどでの
スタディーツアー実施予定(中高全学年対象)

PICK UP PROGRAM

旅行代理店との折衝

各コースの旅行委員が、旅行代理店に直接交渉して当日の計画を立てます。メールやZOOMを使って、積極的に連絡を取りました。他の生徒の要望を最大限に実現させるために、責任をもって取り組みます。

中2日帰り旅行

「全員が楽しめる1日にする」を目標に、生徒が旅行会社と直接連絡を取り合って旅行の企画をしました。5か月間の準備期間を経て、2022年度は「よみうりランド1日コース」と「トンデミ平和島半日コース」の選択制になりました。

6か所に分かれる修学旅行

2022年度は、北海道・神戸・広島・沖縄の4コースに分かれて国内研修旅行を行いました。5月にコース希望調査を行い、6月から半年間かけて準備をします。「自分で決めた」から、当事者意識をもって参加します。

SDGs研修旅行

8月に中学生が希望制で尾瀬へ研修旅行に行きました。尾瀬の自然に囲まれながら、村の抱える課題に対してアイデアを出すことで、SDGsの多様な面について学びます。歌舞伎体験など、歴史や文化に触れる活動もしました。



STUDENT's VOICE

ゼロから企画を立ち上げる、
その難しさと喜びを体感。

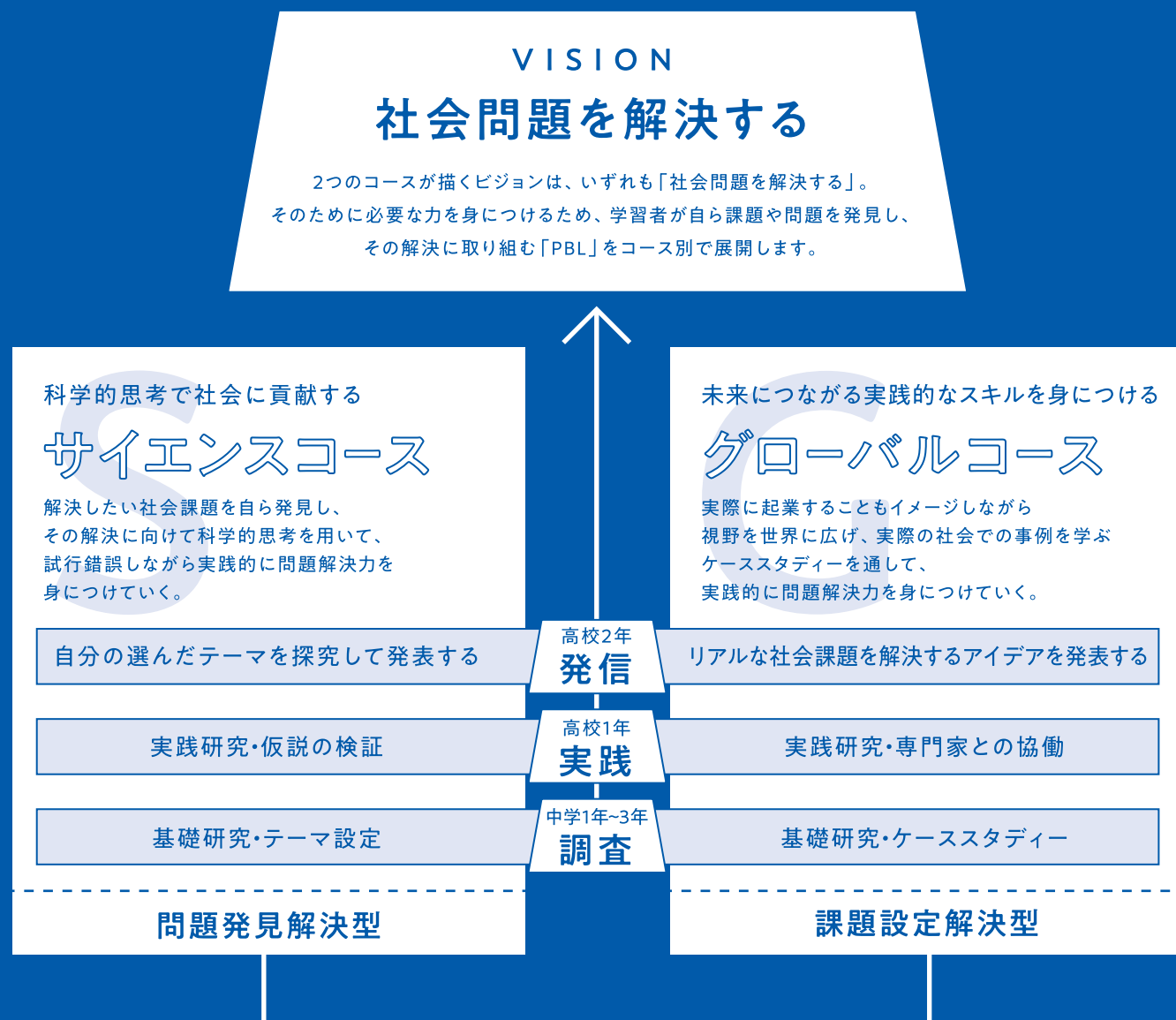
好きな行き先を選んで、好きに過ごす。それだけ聞くとワクワクしますが、その準備は想像以上に大変でした。プログラム、スケジュール、ルート効率…。考えるべきことは山積みでした。委員のメンバーで役割を分担し、プランが完成したときの達成感は忘れられません。そして旅行当日、みんなが楽しむ姿を見たときは、もっと大きな喜びを味わえました。



高校3年 土岐 明来さん

6年間を学ぶきみへ 中高一貫 2つのコース

中学校から始まる6年間は、「これからの社会を担う力」を養成する2つのコースに分かれています。
いずれも文理融合かつ課題解決型のカリキュラムで、社会につながる力を段階的に身につけていきます。



社会のトップランナーからのメッセージ

30名を超える外部協力者

各界の「トップランナー」たちとの連携

様々な企業や、各界のトップランナーの方々とコラボした授業を実施し、学校の中だけでは行うことのできない学びを実践しています。
令和4年度は、総勢28名の協力者とともに授業を作り出しました。
この学びから、新たな興味・関心が生まれ、さらなる学びにつながっています。

#1 アナウンサー 赤平 大さん

個性をどう捉えるか、もう一度考えよう。

エリック・エリクソンの「アイデンティティの確立」に触れながらご自身のこれまでの生き方について話してくださいました。「個性」をフレキシブルに捉えて考え方を変えられることは、チャンスを招くことにも繋がる。そんな赤平さんのお話に引き込まれ、改めて自分の「個性」を見つめ直そうとする生徒たちの姿がそこにはありました。



#2 劇作家 鴻上 尚史さん

おとぎ話から考える、同情と共感の違い。

日本における「世間」と「社会」の違いや、「シンパシー (sympathy)」と「エンパシー (empathy)」の違いについての講義。「シンデレラの継母は何故シンデレラをそんなにいじめたのか」「桃太郎の話に出てくる犬は、何故きびだんご1つで鬼退治についていったのか」。馴染みのある題材から発せられた問いに、1年生も活発に意見を交わし、意欲的に相手の心情に立って理解しようと努めていました。



#3 (株)JEPLAN取締役執行役員会長 岩元 美智彦さん

地球の未来は、今あるものの再利用から。

古着から取り出したエタノールで映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー』のデロリアンを走らせる企画を実現させた方です。スポーツウェアやシューズなど、様々なものがリサイクルを経て地上資源で作られていることを教えてくださいました。多くの企業が、仕組みと技術で地球の未来のための製品開発をしているのだそうです。自然にかえる「みんなの粘土」作りに、生徒たちは夢中で取り組んでいました。



#4 応用神経科学者 青砥 瑞人さん

自分で自分を見つめるメタ認知について。

野球の監督から教わった呼吸法や瞑想法をきっかけに、脳の可能性を知りたいと思った青砥さん。人見知りだった彼が高校中退を経て海外のUCLAで学び、人間の脳の面白さを伝えるようになるまでの経験が語られました。「もう1人の自分を自分で見てごらん?」という言葉から、生徒たちは「自分目線で自分と向き合うことの大切さ(メタ認知)」と「問うこと、追求することの面白さ」を学びました。



3年間で学ぶきみへ 高校2つのコース

高校から入学する生徒は、希望する進路に合わせて2つのコースを用意しています。

2・3学年では自由選択科目も取り入れ、さらに細かく進路実現のための学を深めていきます。

※2024年度から普通コースの募集を停止し、特進コース・文理コースの2コース制に再編。

特進コース

1年次より5(6)教科7科目の大学入学共通テストに対応するために、特進コース独自のカリキュラムを設定。基礎学力の定着とともに、受験に対応する実践的な能力を養成する3年間で過ごします。2年次からは生徒一人ひとりの高い特性に応えるために、多くの選択科目を用意しています。



文理コース

幅広い視野を持って将来の進路を設定できるよう、共通カリキュラムを履修しながら、難関私立大学への進学を実現するための学力も養成するコース。文系・理系に分かれるのは2年次から。自分の描くキャリアに合わせて科目を絞り、効率良く学びを深めます。



高校から始まる学び

受験のための勉強ではなく、めざす未来のため、進路実現を叶えるためのアプローチとして生徒自らが、それぞれの関心をもとに学ぶ領域を自己決定できるシステムです。

FEATURE 1

自由選択科目の拡大

高校3年生では、必修科目を大幅に減らし、自由選択科目を大幅に拡大します。個を軸とした学びを重んじて、生徒一人ひとりの特性や希望に合わせたカリキュラムを用意しています。画一的な詰め込み教育からの脱却を図ります。

FEATURE 2

対話・創造型講座

高校2年生では、1年かけて自ら課題を決定し、正解のない問いに対する最適解を考えていきます。1学期に、社会で活躍する助言者から多くのミッションを与えられ、2学期に自ら設定したテーマを研究し、3学期にプレゼンで社会に発信します。

FEATURE 3

総合的な探究の時間

学力や知識に留まらない能力を磨く総合的な探究の時間。

学年ごとに異なるテーマに取り組みながら、高校時点で社会と向き合って思考を深めます。

1年生

Will Tree

人生を木に見立てて、夢や目標を可視化する活動。自分の夢と向き合いながら丁寧に作品を仕上げていく中で、目標達成のために必要な行動を整理していきます。



2年生

Quest Education

企業と連携しながら職業観を養い、プレゼンテーション能力を磨く探究学習プログラム。2022年度は大和ハウス・メニコン・博報堂・富士通といった、各界を代表する企業と連携。



3年生

World Innovation

社会に対する自らの課題意識に基づき、それらを改善するための案をチームで考案。1・2年次に培ってきた協働力・行動力を発揮しながら、プレゼンテーションに磨きをかけます。



ACHIEVEMENT 2022年度進学実績 (2023.4.8時点 現役・既卒)

国公立

- 宇都宮大学
- 電気通信大学
- 横浜国立大学
- 大分大学
- 秋田県立大学
- 埼玉県立大学
- 東京都立大学
- 神奈川県立保健福祉大学
- 川崎市立看護大学
- 横浜市立大学
- 都留文科大学
- 防衛医科大学校

16名

難関大学

- 早稲田大学
- 慶應義塾大学
- 上智大学
- 東京理科大学
- 学習院大学
- 明治大学
- 青山学院大学
- 立教大学
- 中央大学
- 法政大学
- 関西学院大学

133名

準難関大学

- 成城大学
- 成蹊大学
- 明治学院大学
- 國學院大學
- 武蔵大学
- 東京女子大学
- 日本女子大学
- 北里大学
- 芝浦工業大学
- 東京農業大学

150名

有名私大

- 日本大学
- 東洋大学
- 駒澤大学
- 専修大学

163名

NEWS

2025年度よりコース再編予定

2025年度から、中学1年生と高校1年生にグローバルコースを設置。

中学 1年生

グローバルコース
2クラス募集(予定)

高校 1年生

グローバルコース
1クラス募集(予定)
特進・文理コースは新コースに再編。

EVENT
学校行事

横浜創英の学校行事は、すべて生徒主体。
なぜやるのか、どうするのか。目的も手段も、生徒が自ら考えながら
対話と協働で、それぞれの思い出をつくり上げます。



体育祭
体育祭は、生徒が主体となって企画・運営します。生徒会や実行委員の生徒たちを中心に、競技の内容からルールまで決めました。中高全体で、大いに盛り上がります。



創英祭
様々な団体が、個性あふれる展示や演技を披露します。2022年度の中3は、クラスごとではなく、有志で「展示班」と「演劇班」に分かれて参加しました。やりたいこと優先で集まるから、皆が最後まで一生懸命に取り組みます。



4月	入学式 / フレッシュマンキャンプ(高1) / フレッシュマンjr. キャンプ(中1) / 模擬試験 / 保護者会(高2・3)
5月	球技大会(高校全学年) / 1学期中間試験 / 保護者会(中学全学年、高1)
6月	体育祭 / 二者・三者面談
7月	1学期期末試験 / 生徒総会
8月	夏期講座
9月	創英祭 / コラボレーションウィーク(高1・2) / 4Cスキル合宿(中2) / 模擬試験
10月	2学期中間試験 / 職業別講話(高1) / 保護者会(中3)
11月	企業大学訪問(中1) / 二者面談週間
12月	研修旅行(中3、高2) / 2学期期末試験 / 冬期講座
1月	共通テストプレテスト(高3) / 模擬試験(中1・2、高1・2)
2月	合唱コンクール(高1) / 4Cスキル研修(高1) / 卒業記念講演(高3)
3月	ポートフォリオ発表(中3) / 学年末試験 / 卒業式 / 春期講座

※変更する可能性があります。

CLUB
部活動

誰に強制されるでもなく、自ら選び、参加するのが部活動です。
だからこそ、競技の成績や結果はもちろん、どんな姿勢で取り組むかも大切。
自由な放課後を、どう使うかは自分次第です。



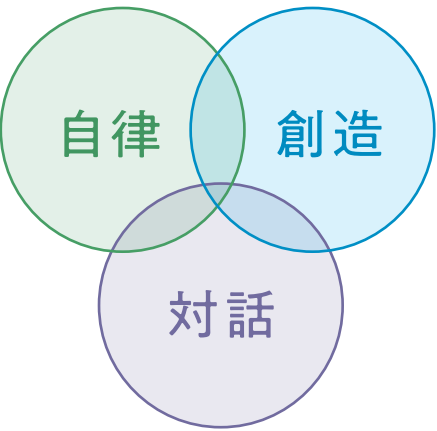
高校体育部	卓球部 / バスケットボール部 / ソフトテニス部 / ダンス部 / ワンダーフォーゲル部 / バドミントン部 / ハンドボール部 / 剣道部 / バトン部[BRIGHTS] / バレーボール部(女子) / サッカー部(男子)
中学体育部	ダンス部 / 剣道部 / バスケットボール部(男子) / サッカー部(男子) / バレーボール部(女子) / バトン部[Power's CanCan](女子)
中高文化部	文芸部 / 園芸部 / ESS部 / イラスト部 / 造形アート部 / 手工芸部 / 調理部 / 音楽部 / 児童文化部 / 吹奏楽部 / 書道部 / 放送部 / 競技かるた部 / 茶道部 / フォトアート部 / 将棋・囲碁部 / 科学部 / 軽音楽部 / パソコン部 / 演劇同好会

※2023年3月時点で、軽音楽部・児童文化部・手工芸部・調理部は高校生のみ入部可能です。

建学の精神

「考えて行動のできる人」の育成

「考えて行動のできる人」が持つべき力
3つのコンピテンシーと9つのスキル



自ら考え、判断し、決定し、行動する

PDCA	目標の実現に向けて、見通しを持って計画的に実行する ●課題を発見し、課題を解決するための計画を自ら立案できる力 ●計画の先にある未来を予測し、より良い選択をする力 ●計画を実行する際に生じた副作用や反応を点検して修正できる力 ●計画の実行によって生まれた成果と課題を評価できる力 ●評価を踏まえ、改善のために計画を修正して新たな実践につなげる力
メタ認知能力	自らの思考・行動を適切に理解し、調整・工夫する ●自らの弱みや短所を含めて、ありのままの自分を受け入れる力 ●他者と比較せずにもう一人の自分で自身を見つめ、状況に応じて適切な判断を下すことができる力 ●自分の思考や行動を俯瞰的に見つめ、より良い方向に変えていくための工夫ができる力 ●自分の思考や行動に変化を与えて、自らの強みや成長につなげていく力
セルフコントロール	自らの感情と言動をコントロールする ●他者との対話で対立が生じた際、自らの感情や言動をコントロールする力 ●困難を打開するために自己を制御し、自らを向上させるためのモチベーションを維持する力 ●良い行動やポジティブな思考を習慣づけて持続させ、自己を肯定しようとする力

多様性を尊重し、対話を通じて対立・ジレンマを解決する

エンパシー	考え方の違いを他者の立場に立って理解、尊重する ●意見や考え方については対立やジレンマがあって、それが当然であることを理解できる力 ●他者の立場や考え方の違いを理解する力 ●人権に関わる知識・スキルを持ち、自分と違う立場の人を尊重する力
パブリックリレーションズ	対話を通して他者との共通の目的を見つけ出す ●持続可能な社会を作ることをめざし、他者との考え方や意見の違いを尊重する力 ●誰も取り残さない共通の目的を発見し、その目的のために双方向の対話ができる力 ●合意ができれば、その実現のために自分の考えを修正することができる力
コラボレーション	共通の目的の実現のために他者と協働する ●多様な個性に触れることで自分が高まることを知り、新たなチームの再構成を働きかける力 ●それぞれの個性や強みを分担・補完しながら、調整して他者とつながることができる力

問題を解決するために情報や技術等を活用し、新たな価値を生み出す

サイエンスリテラシー	課題に対して問いや仮説を立て、科学的に解決する ●知識、情報、テクノロジー等を活用して、目的と他者を意識した表現をする力 ●自然や社会の事象や現象について課題を見つけ、それらを解決する方法などについて、仮説を立て、実験・観察、データなどをもとに検証することができる力
クリティカルシンキング	本質を見極めるために、自分や他者の考えを吟味する ●既存の概念や自らの思考・判断の思い込みの傾向を知る力 ●自分の考えの根拠を明確にし、自分が納得いくまで掘り下げて考えることができる力
情報リテラシー	信頼できる情報を収集・吟味し、適切に活用する ●課題発見・解決に必要な情報を見定め、適切な方法を用いて収集する力 ●情報の出処や目的を吟味し、得た情報が「事実」であるかどうかを吟味できる力 ●インターネットやメディア等を活用し、情報を適切に発信できる力 ●何のため(目的)と誰に向けて(他者)を意識して、自分の考えを発信できる力

保護者の皆さまへ。

もともと子どもたちは生まれた時は主体的な存在です。

しかし、良かれと思い、手をかければかけるほど

子どもたちの主体性は奪われていきます。

事実これまでの学校は、子どもたちに多くのことを与え続けてきました。

そんな教育をどこかで変えなければ、

社会を創っていく当事者に育てることはできません。

全ての子どもたちが、時に誰かの力を借りながら自分の足で歩いていく。

そんな主体性のある子どもたちを育てていきたいと考えています。

そのために、学校で出会う大人が素敵な存在であり、

持続可能で平和な未来につながっていく……

学校をそんな希望にあふれた場にしていきたいと考えています。

私たちの改革はまだスタート地点に立った状態ですが、

私たちは、この目標に向かって日々チャレンジを続け、確実に歩んでいます。

その道のりは平坦でなく、時に我慢が必要です。

私たちと共にそんな教育を目指していきませんか。

